

与格交替における CAUSE-HAVE について*

嶋村 貢志

金沢学院大学・神戸市外国語大学

福田 純也

中央大学

概要

本稿では英語の与格交替における所有の含意について考察する。先行研究では、二重目的語構文 (DO) とそれに対応する前置詞目的語構文 (PO) の交替において、前者のみが間接目的語に相当する名詞句が直接目的語に相当する名詞句を所有するという含意を持つと指摘されることが多い。しかしそのような含意は DO 文に常にあるわけではなく、Rappaport Hovav and Levin (2008) によれば、そのような含意は彼女らが提案する動詞クラスごとで異なるという。しかし、本研究ではデータの信頼性を担保するため英語の母語話者 100 人に調査を実施したが、Rappaport Hovav and Levin の観察は不十分であることが分かった。この結果を受けて与格交替をどのように分析すべきか、生成文法と認知言語学の立場から考察し、これらの異なる文法理論がどのように協力していけるか、一つの可能性を示唆する。

1 はじめに

生成文法および認知言語学の研究において、英語の二重目的語構文 (DO) とそれに対応する前置詞目的語構文 (PO) の交替は、与格交替 (Dative Alternation) と呼ばれ広く研究されてきた。具体的には次のようなものである。

- (1) a. John gave Mary a book. (DO)
b. John gave a book to Mary. (PO)

本稿は、与格交替に関する所有の含意の有無について、その容認性判断の実証実験を行い生成文法と認知言語学の観点から当該の構文交替を考察し、これらの異なる文法理論がどのように自然言語の理解を深めるために協力できるか、一つの可能性を示すことを目的とする。

2 DO における所有の含意とその統語構造

2.1 同一基底構造

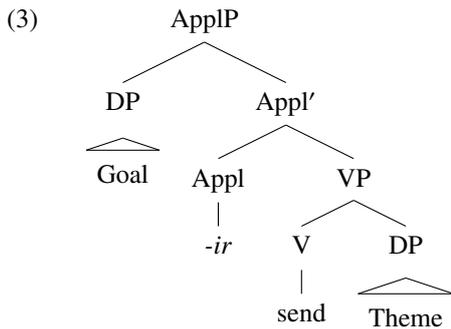
DO において所有の含意があるかどうかは、先行研究でしばしば議論されるところであるが、PO には所有の含意がなく、DO にもみそれがあるという観察が正しいとすると、与格交替が同一の構造をその基底に持ちどちらか一方が統語操作によって派生されるという分析にとって問題となり得る。というのも DO または PO の構造を選択するかは、全て格付与などの統語的要因によるものでそこで使われる語彙項目は同じだからである。例えば同一基底構造を仮定する Larson (1988) は、PO が基底であり DO がそこから派生されると論じているが、なぜ DO に変形した時に間接目的語が直接目的語を所有している含意が生まれるのかを説明することは難しい。

*調査に用いた英語の例文作成には、Johnathan David Bobaljik 氏と Trevor Sitler 氏の両氏にご協力いただいた。両氏に感謝申し上げます。また、分野の異なる二人の共同研究のきっかけを作ってくれた「ゆる言語学ラジオ」の水野太貴氏と堀元見氏の両氏にも感謝申し上げます。

また、Baker (1988) は (2a) のチェワ語 (Chichewa) の *kwa* ‘to’ と適用態 (applicative) 接辞の *-ir* を P と考え、(2a) から (2b) への変形を P の V への主要部移動によって説明しようとする。この意味において Baker の分析は、Larson のそれと同様、同一の基底構造から与格交替を説明する。よって Baker の分析も、なぜ英語の DO のみが所有の含意を持つか説明することが難しいように思われる。Marantz (1993) も (3) のような構造を提案している。

- (2) a. Ngombe zi-ma-tumiz-a mitolo ya udzu kwa mbuzi.
 cows SP-PAST-send-ASP bundles of grass to goats
 ‘The cows sent bundles of grass to the goats.’
 b. Ngombe zi-na-tumiz-ir-a mbuzi mitolo ya udzu.
 cows SP-PAST-send-APPL-ASP goats bundles of grass.
 ‘The cows sent the goats bundles of grass.’

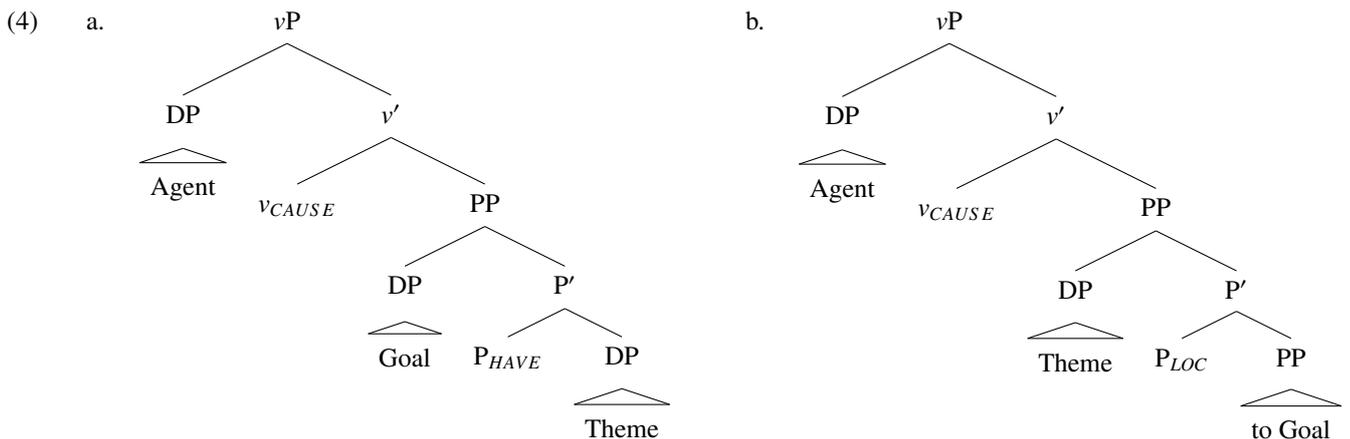
(Baker 1988, 280)



もちろん (3) の DO の Appl と PO の P を別の統語範疇と考え、Appl のみが当該の意味を表現すると仮定すれば問題は無い。このような可能性は、与格交替が派生的には独立していることを意味する。このような DO と PO に独立した構造を仮定するアプローチを次節で議論する。

2.2 独立基底構造：CAUSE-HAVE

DO 文と PO 文にそれぞれ独立した構造を仮定する分析として広く採用されているものに、Beck and Johnson (2004) や Harley (2002) などが主張する DO 文の CAUSE-HAVE 構造がある。(4) の構造を観察されたい。



(4) は Harley (2002) に基づくが、(4a) では *v* が使役 (CAUSE) の意味を担い、その補部は PP を成しているとされている (Pesetsky 1995 も参照のこと)。PP が表現する意味は Goal 項が Theme 項を所有 (HAVE) するというものであり、Agent はこの状態を使役するのである。(4) の構造が正しいとすると、give などの動詞は DO の場合、主要部移動によって合成された *v*_{CAUSE}+*P*_{HAVE} の形態的具現形であるということが出来る。このような仮定は Marantz

(1997)などが提唱する分散形態論の枠組みで可能である。(4b)はPOの構造である。ここでもgiveなどの動詞は $v_{CAUSE}+P_{LOC}$ の合成が形態部門でgiveと発音される。これ以上の(4)に関する議論は誌面の都合上割愛するが、(4)はPOとDOに異なる統語要素を立て、それぞれ独立した構造を仮定している。よって、なぜDOに所有の含意が存在し、POにはそれが存在しないかを説明することができる。

3 なぜ与格交替があるのか – 認知言語学の観点から

DO文とPO文の二種類の構文がそれぞれどのような文脈で使い分けられているかについては、さまざまな要因が提案されている。よく知られる例としては、長い名詞句はDOの直接目的語に位置されづらく、POの前置詞句として後置されるというものである(Wasow 2002)。また、目的語名詞の参照元が直前の文脈で与えられておらず、不定冠詞が用いられている場合、二重目的語構文の直接目的語には置かれにくい(Bresnan et al. 2007)。これらは、情報構造の点から優先される構文が決定される例である。またある項構造が他より選好される理由として、意味の観点とは独立して慣習としての用法が強く影響することもある(e.g., Ambridge et al. 2018; Tachihara and Goldberg 2020)。これらは認知言語学における用法基盤モデルによって研究が進められている。

しかし、言語使用上このような意味とは独立した要因の影響があるとしても、この二つの構文の使用に意味的な要因が関係していないと考えられているわけではない。文法現象を人間の一般認知の反映と捉える認知言語学をはじめとする立場において、DO/PO文の意味的な分析は盛んに行われているが、その多くは上述の統語論の研究と同様、DO文に所有の意味を仮定している。たとえば、Langacker (1986) や Pinker (1989) は与格交替を、移動と所有の地と図の反転と説明しており、多くの研究者がそれに則って与格交替を分析している。このような解釈の結果として(5)のように、受け手が無生物の場合は「所有者」として解釈することが難しくなり、DO文が不自然と解釈されることがよく知られている。

- (5) a. I sent a walrus to Antarctica.
 b. ?I sent Antarctica a walrus. (Langacker 1986, 14)

また、以下の(6)の文のように、headacheが実際に「移動した」わけではなく、目的語の位置にある被動作主がheadacheを所有する(HAVE)という意味合いで解釈されるので、PO文は非文になり、DO文が容認される(e.g. Ambridge and Ambridge 2020)。

- (6) a. He gave me a headache.
 b. *He gave a headache to me.

よって、認知言語学においても「所有」という概念はDO文において重要な働きをしている。

4 DO文における所有の含意再考

以上、生成文法と認知言語学における与格交替の分析を簡単に概観したが、DOにおける所有の含意が常にあるわけではないことが広く知られている。DOやPOの構文交替に関わらず、動詞のタイプによってどちらの構造でも所有の含意がある(あるいはない)ことがRappaport Hovav and Levin (2008)によって以下のように指摘されている。

- (7) a. #My aunt {gave/lent/loaned} my brother some money for new skis, but he never got it.
 b. #My aunt {gave/lent/loaned} some money to my brother for new skis, but he never got it.
 (8) a. #My brother sold Caroline his old car, but she never owned it.
 b. #My brother sold his old car to Caroline, but she never owned it.
 (9) a. Lewis sent Sam a bicycle, but it never arrived.

b. Lewis sent a bicycle to Sam, but it never arrived.

(Rappaport Hovav and Levin 2008, 146-147)

(7) や (8) で用いられている give/lend/loan/sell は GIVE 型動詞として Rappaport Hovav and Levin が言うところの caused possession の意味のみを持つという。それに対して send などの THROW 型動詞は caused possession と caused motion の 2 つの意味を持つという。よって、(9) のように所有関係が成立しなくてもよい。この事実は HAVE に依拠する DO の統語構造の統一的な分析を不可能にする。さらに以下で見るように Rappaport Hovav and Levin の分類も所有の含意に関して不十分である。

本研究では、与格交替における所有の含意に関するデータの信頼性を担保するため容認性判断に関する実証実験を行った。与格交替を DO と PO の両構文を許すといわれる動詞意味クラス (Pinker 1989) から GIVE 型、THROW 型、そして TELL 型を選択し、各動詞クラスから高頻度のものを 4 つずつ選択した。そして実験 1 (図 1) では、まずこれらの動詞を使って所有のキャンセルを含まない DO/PO の文を作成し、英語ネイティブスピーカー (NS) によって容認可能であるかどうかを確かめることにした。Amazon Mechanical Turk を使用し、100 人のアメリカ在住の英語母語話者が実験に参加した。なお募集時点では「英語ネイティブスピーカー」を、英語が第一に学んだ言語であり、なおかつ現在支配的な使用言語であると自認している話者と定義し募集を行なった。参加者は、同意書と個人情報を訪ねるアンケートに回答したのち、容認性判断課題に従事した。課題には、キャンセル文を含まない DO および PO の刺激文 (e.g., My aunt gave my brother some money for new skis/My aunt gave some money to my brother for new skis) と、与格構文を含まないフィラー文 (うち半数は英語として規範的な用法でないと考えられるもの) が全体の 1/3 含まれていた。また同時に、与格交替とは関連のない容認性判断課題を 2 セット行った。参加者は、各文が英語の文としてどの程度容認可能かについて、1 (全く容認できない) から 5 (完全に容認できる) の 5 段階で判断を行った。分析では、各文の評定値を、「どちらともいえない」を意味する 3 を基準として、ベイズ因子とベイズ確信区間により検討した。結果として、図 1 が示すようにすべての文において評定値の信用区間が評定値 3 と重複することなく容認されていることを確認した。

さらに実験 2 (図 2) として、先程の実験 1 で取り扱った文にキャンセルを含意する節を付加した場合にその容認度がどの程度変化するかを調べることにした。DO にのみ所有の含意がある場合、DO のみ容認不可能となり、GIVE 型動詞に所有の含意がある場合、GIVE 型動詞を含む文は DO/PO に関係なく、「どちらとも言えない」の 3 を下回り容認不可能となることが予測される。実験 1 と異なる 100 人のアメリカ在住の英語ネイティブスピーカーを対象として参加者を募り (募集の手順や要件は実験 1 と同様)、実験 1 と同様の手順で実験を行なった。結果として、キャンセルを含意する節を付加した場合は全体的に容認度が下がる傾向にあり、特に send/lend/show などは評定値の確信区間に 3 を含まず容認不可能と判断されることが明らかになった。一方で、GIVE 型動詞の中でも、give や loan は「どちらともいえない」の 3 を確信区間に含む数値を示し、容認不可能と判断されるほど容認度が低下しないことも同時に明らかになった。また、DO と PO 間の変動は類似した変化を見せ、片方が完全に容認されなくなるといった違いは見られないという結果となった。

図 1: 所有のキャンセルなし

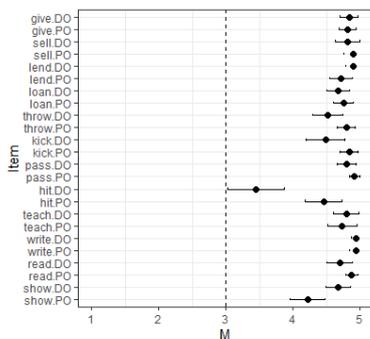
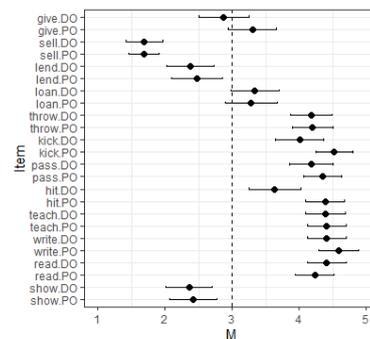


図 2: 所有のキャンセルあり

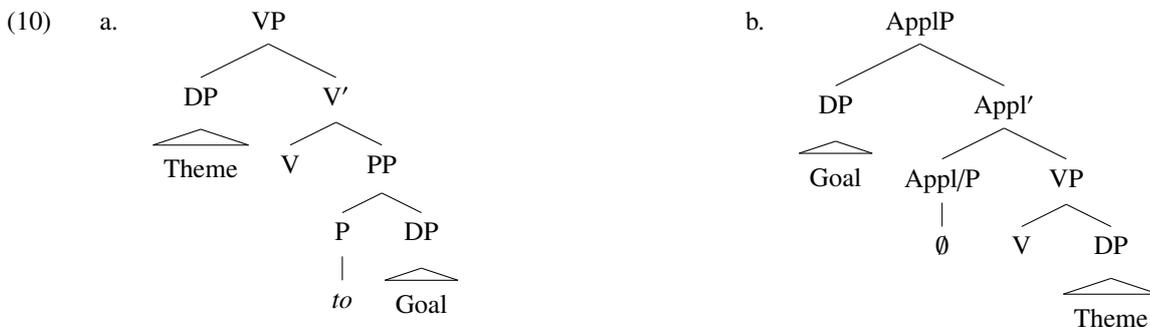


5 与格交替の妥当な説明を目指して

以上の所有の含意に関する容認性の実証実験の結果は、Rappaport Hovav and Levin (2008) の動詞クラス分類を採用しても、当該の解釈が各クラスの動詞に語彙的にあるかないかを判断することができないことを示している。よって CAUSE-HAVE に基づく分析は、所有のキャンセルが付くことで容認性が著しく下がった sell/lend/show に対してのみ妥当であると言える。このような事態に鑑み、本研究は与格交替に関する解釈の変化を生成文法に求めず、認知言語学的立場から考察することにする。ただし、与格交替の意味全てが認知言語学的に決まると主張しているのではないことに留意されたい。というのも照応詞の認可や数量詞の作用域といった命題的意味論に関する解釈は統語と意味の対応関係によって決まる (Larson 1988)。この意味において生成文法が関係するのはこのような限られたものであると考えているのである。

5.1 生成文法が出来ること

統語構造に関する意味のみに限定した場合、命題的に DO と PO は同じである。よって2つの構造は同じ語彙項目から作ることが望ましいと考える。そこで (10) の構造を提案する。



(10a)でも(10b)でも Theme 項は V が、Goal 項は P が導入する。しかし P は (10b) では適用態の主要部として VP を補部を取る。この場合は P は形態的にゼロ接辞であるが、(2) のようにチェワ語などでは具現化される。

意味的には (11) を仮定する。 e はイベントの変項である。そうすると、どちらも個体の集合から事象の集合へと写像する関数である。PO を作る場合、まず PP が形成され事象の集合が表現される。それが V と併合されるが、この場合の意味的合成は Kratzer (1996) の Event Identification (EI) ($\langle st \rangle, \langle e, st \rangle \rightarrow \langle e, st \rangle$) を通して行われると仮定する。次に DO を作る場合は先に VP が形成され、その後 P が ApplP の主要部として VP と併合されこの場合も意味的には EI を介して合成される。よって命題的には PO と DO は同じであるが、V と P/AppI の意味的合成の順序が異なりそれが導入される項の順序と各項の C 統御関係を決定する。

(11) a. $[[V]] = \lambda x \lambda e. V(e) \wedge \text{THEME}(x)(v)$ b. $[[\text{Appl/P}]] = \lambda y \lambda e. \text{GOAL}(y)(e)$

5.2 所有の含意についての認知言語学的アプローチ

ここまでの本研究の分析において DO 文に含まれる HAVE の語彙的意味の存在を否定しようとする場合、これらの説明も再考が迫られる。ここでは、Langacker (2008) の認知文法の枠組みを採用してこの構文間の意味的な異なりを概念化の観点から説明する。

認知文法では、他動詞構文の平叙文では主語位置にある動作主が最も際立ちランドマークの地位が与えられ、直接目的語には次点の際立ちをもつトラジェクターの地位が与えられるとされる。その結果として PO 文では移動物、DO 文では移動先にトラジェクターが与えられ、そこに直接的な影響関係が示唆されることとなるが、他方の

名詞は相対的に背景へ退くこととなる。その上で、譲渡のイベントは社会的相互作用でもあるため、受け手が背景になる PO 文とは異なり、受け手に焦点のある DO 文はその社会的相互作用の側面が前面に押し出されることとなる。このような構文に含まれる概念化の異なりにより、上述 (5) と (6) の DO/PO の文法性の異なりに一貫した説明が与えられる。(5) は直接目的語に無生物が配置されることにより、DO 文に含まれる動作主と被動作主の社会的相互作用と相性が悪くなる一方で、移動物に焦点が当たる PO 文は容認される。(6) に関しても、動作主と被動作主の相互作用の結果として被動作主が頭痛を被ることになったと解釈できる一方で、動作主が頭痛に作用して非動作主に頭痛が移動したとは考えづらい。なお Langacker (1986, 2008) は、この様な概念化の結果として、PO はプロファイルされた前置詞により経路が強調され、DO はそれがないことにより所有の意味が含意されているが、同様の説明で所有を説明に含めずとも DO 文の意味を分析することは可能である。すなわち、DO が所有を含意しているように思われるのは上述の様な概念化の付帯的現象であり、構文内で所有 (HAVE) が文法知識として心的に表象されているわけではないと本稿では結論づける¹。

6 おわりに：動詞間の所有の含意のばらつきに関しての一考察 – 生成文法と認知言語学

以上認知言語学的な観点から DO に所有の意味が含まれる傾向がなぜあるのかを説明した。5.2 節の議論が正しければ、sell/lend などは DO ではトラジェクターとして Goal 項が受ける影響がより強いということなのであろう。というのも sell は Goal 項が Agent 項に金銭を渡すという社会的なやりとりが存在する。lend に関しても Goal 項が Agent 項に「何かを借りる」という社会的責任を負うことになる。show に関しては Agent 項が Goal 項に「何かを見せる」という視覚的なやりとりが発生しており、Goal 項がそれを見ないというのは特別な文脈を想定しない限り難しい。しかしこのような平易な憶測程度の考察は、例えば loan がなぜ lend ほど文法性が下がらないかを説明することはできない。おそらく所有の意味がどこまで慣習化されているかは動詞ごと、さらには話者ごとによって違っているのであろう。よって、これらの動詞は、構文に関係なく DO だけでなく PO でも所有のキャンセルをするとその容認性が下がる。このような考え方は生成文法の理論的枠組みに合わないわけではない。Halle and Marantz (1993) や Marantz (1997) によって提唱された分散形態論 (Distributed Morphology) の枠組みでは語形成も統語で行われる。そして各語彙に固有の意味付与は統語・(形式) 意味部門の後、話者の百科事典的な知識を参照しながら決定されると仮定されている。例えば、 $\sqrt{\text{SELL}}$ は v との併合を経て sell となるが、それが排出 (Spell-Out) された後、その項構造だけでなくそれに固有の慣例的な意味も含めて話者の百科事典的な知識を参照して決定されることになる (項構造に関しては Lohndal 2014 も参照のこと)。おそらくこのような過程において、認知言語学と生成文法が自然言語の特性の解明を目指し協力していけるのではないだろうか。両者は対立するべきではなく、手を取り合って言語知識の解明に進んでいくべきであると考えられる。

参考文献

Ambridge, Ben, and Chloe Ambridge. 2020. The retreat from transitive-causative overgeneralization errors. In *Current perspectives on child language acquisition: How children use their environment to learn*, ed. Caroline F. Rowland,

¹なお DO 文に所有の含意がある証拠として、以下の二重目的語構文と for 与格構文の交替可能性が挙げられている。

- (i) a. *Gentlemen open women doors.
b. Gentlemen open doors for women.

これらの文は、直接目的語の woman が間接目的語の doors を所有するという解釈は得られないため、二重目的語構文が非文となり、for 与格は正文となると説明されてきた。しかし、これらの事象は移送の伴うイベントを表現したものではないため、所有の意味などとは関係なくそもそも二重目的語構文も to 与格構文も用いることができないとも考えられる。ちなみに、移送の含意が見込まれる Sally baked her sister a cake といった文は二重目的語構文でも可能である (Goldberg 1995)。この場合に *Sally baked a cake to her sister が非文になるということに関しては、(i) で示されたように「受益・被害を表す場合は DO 文が PO 文より選好される」という事実により説明が与えられる。

- Anna L. Theakston, Ben Ambridge, and Katherine E. Twomey, 113–130. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ambridge, Ben, Libby Barak, Elizabeth Wonnacott, Colin Bannard, and Giovanni Sala. 2018. Effects of both preemption and entrenchment in the retreat from verb overgeneralization errors: Four reanalyses, an extended replication, and a meta-analytic synthesis. *Collabra: Psychology* 4. 23.
- Baker, Mark C. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Beck, Sigrid, and Kyle Johnson. 2004. Double objects again. *Linguistic Inquiry* 35:97–124.
- Bresnan, Joan, Anna Cueni, Tatiana Nikitina, and R Harald Baayen. 2007. Predicting the dative alternation. In *Cognitive foundations of interpretation*, 69–94. KNAW.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Halle, Morris, and Alec Marantz. 1993. Distributed morphology and the pieces of inflection. In *The view from building 20*, ed. Ken Hale and Samuel Jay Keyser, 111–176. Cambridge, MA: MIT Press.
- Harley, Heidi. 2002. Possession and the double object construction. *Yearbook of Linguistic Variation* 2:29–68.
- Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In *Phrase structure and the lexicon*, ed. Johan Rooryck and Laurie Zaring, 109–137. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Langacker, Ronald W. 1986. An introduction to cognitive grammar. *Cognitive Science* 10:1–40.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Larson, Richard K. 1988. On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19:335–391.
- Lohndal, Terje. 2014. *Phrase structure and argument structure: A case study of the syntax-semantics interface*. Oxford: Oxford University Press.
- Marantz, Alec. 1993. Implications of asymmetries in double object construction. In *Theoretical aspects of bantu grammar*, ed. Sam Mchombo, 130–150. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Marantz, Alec. 1997. No Escape from Syntax: Don't Try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon. In *Proceedings of the 21st Annual Penn Linguistics Colloquium*, ed. Artemis Alexiadou, Laura Siegel, Clarissa Surek-Clark, and Alexander Williams, volume 4, 201–225.
- Pesetsky, David. 1995. *Zero syntax*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka, and Beth Levin. 2008. The English dative alternation: The case for verb sensitivity. *Journal of Linguistics* 44:129–167.
- Tachihara, Karina, and Adele E Goldberg. 2020. Cognitive accessibility predicts word order of couples' names in English and Japanese. *Cognitive Linguistics* 31:231–249.
- Wasow, Thomas. 2002. *Postverbal behavior*. Stanford: CSLI Publications.